

構築会兵庫支部 平成9年度総会・講演会の概要

平成9年度の総会・講演会は、構築会の金田宏会長、土木工学教室の西村宣男教授、建築工学教室の舟橋國男教授をご来賓にお迎えして、会員43名の出席のもと11月に開催しました。講演会は、神戸港開港130年、湊川改修100年を記念して「土木屋から見た神戸の歴史」と題し神戸市の中山久憲氏(C73)が講演、自然の力で誕生した兵庫の地形を活かした大輪田泊から兵庫津を経て神戸港へ至る歴史を興味深く聞き入りました。

奈良時代に築かれた大輪田泊は天然の良港と言われますが、なぜ兵庫の地だけが南に突出して、西からの波浪を防ぐ特異な地形になったのか、から物語は始まりました。地殻変動による隆起と沈降により六甲山系と大阪湾が120万年前に形成され、50万年前に明石海峡が出現。六甲山系の土が川の流れて海に注がれ、明石海峡の潮流に乗りながら流速は徐々に低下、終着点が和田岬付近でした。また、そこに流れる湊川の広大な流域から大量の土砂が運ばれ、これを海水が地均しすることで広大な平坦地となりました。つまり、兵庫の大地は祖父母を六甲山系に、父を明石海峡の潮流に、母を湊川の源流に生まれ成長してきたとのお話です。

12世紀半ばに平清盛が対宋貿易の拠点とすべく大輪田泊の修築に着手、その後、大輪田泊は兵庫津と名前を変え、港湾都市としての道を歩みます。16世紀には、内外交通の要衝地に兵庫城を築くに当たり、城下町建設に支障となる古湊川が旧湊川に付け替えられました(有力説)。江戸時代に入っても経済の中心は大阪で、鎖国政策の中で生産規模が拡大して各地の特産品が流通し、大量輸送に適した海路の玄関口兵庫の港には多くの商船が出入りして繁栄を続けます。

1868年の兵庫開港は神戸港の門出でした。居留地の建設地に人口希薄な神戸村が選ばれ、神戸は新しい港湾施設と居留地の建設によって国際色豊かな貿易港として発展する一方、兵庫は港湾機能に支えられた工業都市として大きく変貌していきます。兵庫港では南東の風を受ける和田岬沖合いが小型船の難所で、その安全な航行と停泊のため和田岬をショートカットする形で兵庫運河が開削(1874～1899)され、その両側の護岸を利用して様々な工場の立地が進みました。この時期、勅令により港の名称は神戸港と総称されるようになりました。

一方、旧湊川付け替え以降も氾濫は繰り返され、運ばれ続けた土砂で天井川となった堤防は神戸と兵庫のまちを分断し交通の大きな障害にもなったため、旧湊川は再び付け替えられます(1897～1901)。下流部が荊藻川水系につながる現流路を開削、会下山の下には河川トンネルを建設し新湊川として流れを変え、旧湊川は埋め立てられて新開地が誕生しました。貿易で発展する神戸、工業で成長する兵庫、その間の歓楽街新開地は商業・文化の中心となり、こうして兵庫運河の開削と旧湊川の付け替えという大手術は、その後の神戸の急速な発展の源泉となります。

母なる湊川は、流れを変えながら大地を育てましたが、人にとっては常に洪水の危険と隣り合わせでした。暴れない湊川は住人にとって永遠の夢であり、その時代毎の治水対策が工夫され、流路を変える湊川の歴史に反映されてきたと言えるとのこと。かつて湊川が流れていた地は、現在、様々なプロジェクトが進んで姿が変わろうとしています。永遠なる湊川に抱かれた兵庫の大地の来世紀は、湊川ルネッサンスの時代になるだろう、と講演を締めくくられました。

懇親会は、講師と来賓を囲んで楽しく歓談しましたが、過去の幾多の災害を乗り越え、まちと港を蘇らせてきた先人の知恵と努力は、阪神・淡路大震災からの復旧・復興にも連綿と受け継がれていると確信するとともに、私たちもこの経験を後世にしっかりと引き継いでいかねばと決意を新たにしたいひとときでもありました。